

M・ダンブル編『ドリュ，作家にして知識人』

松尾，剛

<https://doi.org/10.15017/9999>

出版情報：Stella. 17, pp.241-246, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

M・ダンブル編『ドリユ，作家にして知識人』

松 尾 剛

20世紀も残すところあと10年を切ったとき、70年代のブーム以来やや沈滞
ぎみであったドリユ・ラ・ロシエル研究に大きな転機をもたらす事件が起き
た。1992年、ついに彼の『日記1939-1945』が出版されたのである¹⁾。かねて
から自筆稿の閲覧を許された研究者たちにより重要性が喧伝されていただけ
に、その公刊はまことに喜ばしいことであった。だが同時に『日記』はドリユ
を知ろうとする者に矯激な反ユダヤ主義者である彼の肖像を見せつけた。たし
かにドリユはすでに小説『ジル』のなかで人種主義を表明している。しかしな
がら、ナチス敗北後もフランスにとどまり遂には自殺したことで殉教者のイ
メージに包まれがちなうえ、占領下での反ユダヤ主義的言辞が比較的少なかつ
たことや、ユダヤ人であるかつての妻を強制収容所から救い出した事情もあつ
て、彼の人種主義的な側面は見落とされがちだったのである。それにたいして
『日記』が容赦なく暴き出したのは徹底した反ユダヤ主義者としてのドリユで
あった。こうして彼をとりまく神話のひとつが崩されたのである。

同じ年には、彼の時事評論を中心に編まれた『見出されたテキスト』やピ
エール・ウベールの『暗い日々「新フランス評論」』も出版され、さらにそれ
と歩調をあわせて、占領下にドリユが編集長を務めた「新フランス評論」誌が
1940年12月号から翌年6月号までではあるが合本で復刻された²⁾。そして
1993年刊の『ドリユ＝ジェラメック兄妹往復書簡集』³⁾。ここに収録された手
紙からは、けっして幸福とはいえない家庭で苦悩し、恋人と親友に安らぎを求
める若き作家の姿がリアルに見てとれる。われわれはドリユの青春に、彼の回
想を通してでなく、直接に立ち会うことができるようになったのだ。これら新
資料の出版にともない、長らく絶版になっていた文学作品もつぎつぎとガリ
マール社の「リマジネール叢書」から再版されている。ちなみに同叢書に収め
られた作品を刊行順に挙げれば——『ペルーキア』『馬上の男』『女たちに覆わ

れた男』『シャルルロワの喜劇』『夢見るブルジョワジー』、『ジル』や『欺かれた男の日記』、『不愉快な物語集』など以前から読まれてきた小説をこれに加えれば、ドリュという存在にアクセスすることはかなり容易になったといえるだろう⁴⁾。

これらの基本資料の刊行はドリュ研究にひとつの方向性をもたらしたといえる。その方向性とは、ドリュの政治的軌跡を念頭に置きながら、しかし単なる断罪に終わることなく基本資料の丁寧な読解にもとづいた研究をおこなうこと、それにより作家の纏った神話のヴェールを剥ぎ落とすことである。特異な人生ゆえに神話化された作家だからこそ、そして対独協力ゆえに読み手の道徳的・政治的な価値判断が先行しがちな作家だからこそ、この当然ともいべき研究姿勢を確認しておくことが必要なのだ。

そのような新たな研究の幕開きを告げるのが、1993年12月にパリでおこなわれた国際コロックの研究報告を収めた本書『ドリュ、作家にして知識人』である⁵⁾。もちろんドリュにかんするコロックとしてはこれが初めてのものとなる。ロジェ・ニミエ研究センターと、その中心人物であるパリ第3大学教授マルク・ダンブルが企画を担当した。発表者は総計15名にのぼる。本書の構成は2部立てで、前半が「知識人、政治、歴史」、後半が「作家」と題されている。第1部はドリュを政治や時代との関わりの中かでとらえ、第2部は文学的著作の読解を中心とする。巻末には付録として、友人ジャン・ボワイエに宛てられた1920年11月3日付の手紙が掲載されている。

まずダンブルによる「序文」はコロックの基本姿勢をつぎのように説く。すなわち、「その記憶が現代フランス史における暗黒の年月に結びついたままである」作家のコロックにはそれなりのリスクがともなうものの、民主主義国家において学問はあくまでも自由であるべきだ。しかるに今日までドリュがエッセイストや歴史家の著作で話題になることはあっても、大学での文学研究の対象になることはほとんどなかった。かかる態度はけっきょく思想の「ダークゾーン」を逆説的に容認してしまうことに他ならない。したがってわれわれが目指すべきはドリュの追悼でもなければ復権でもなく、まったく自由な学問的探求なのである——。以上のような認識に立って企画されたコロックが具体的にはいかなる成果をおさめたのか、興味津々たるところだ。では第1部に収録された論文から簡単に紹介していこう。

ドイツ語圏の研究者ヨーゼフ・ユルツは、ピエール・ブルデューの〈界〉概念やエリクソンの自我心理学によりながら、ドリユのファシズムへの道程を手際よく整理する。つづいてジェラルド・ルロワは、占領下におけるドリユの時事評論を細かく吟味し、そこに一貫して見られるのは作家の徹底した〈力〉への信頼であったことを示す。いずれの論考も従来の研究水準を大きく更新するものではないが、作家の軌跡を著作に即しつつ丹念に辿ろうとする姿勢は積極的に評価されるべきだろう。また「ドリユ・ラ・ロシエルと共産主義」と題されたジャン＝ピエール・モレルの分析も興味ぶかい。占領下のドリユがファシズムの敗北を前にしてとつぜん共産主義を賛美したことはよく知られているが、モレルは共産主義が『フランスの測定』以来一貫してのドリユの関心事であったことを指摘する。ドリユは、共産主義は結局のところ機械文明の支配下に置かれるしかなく、それを打破しうるのはファシズムの精神性だと考え、ナチズムへのアンガージュマンをおこなった。しかしファシズムの敗北を確信した彼は、ナチズムは機械の力に屈したと再度結論づけ、恐怖政治をおこなうスターリンの野蛮にこれを打破する可能性を見たのである。以上がモレルの主張だが、これはドリユの政治思想におけるファシズムと共産主義の関係を明晰に論じた好発表といえる。

つづくリチャード・J・ゴルサン、ジャン＝イヴ・ゲラン、ポール・ルナール、マルク・ダンブルらの論考はいずれもドリユの周辺を考察したものである。ゴルサンはアメリカにおけるドリユの受容と研究を、ゲランは作家たちによって小説に描かれたドリユの肖像を、ルナールはドリユとジャック・オーディベルティの友情を、ダンブルは「軽騎兵」たちの目に映ったドリユのイメージをそれぞれ論じている。なかでもルナールによる研究は、IMECの「オーディベルティ資料」に含まれるドリユの未刊の手紙にもとづき友情の軌跡を再構成するもので、ドリユ研究がいっそう進展するためには新資料の発掘・公刊が強くのぞまれるだけに貴重な貢献である。

第2部「作家」はそのタイトルの示すようにドリユの文学的な著作が論じられている。従来のドリユ研究にしばしば見られた欠陥として、文学作品の精緻な読解が不足していた点があげられよう。たしかに波乱に富んだドリユの人生はわれわれの興味を強く喚起するものであるが、それにしても論者の多くはあまりにもそれに依拠しすぎ、個々の作品への微視的な目配りを欠いていた。そ

の結果、ソランジュ・レーボヴィッチも指摘するように、どの言説も同語反復的なものになりがちだったのである⁶⁾。それゆえこのコロックがあらためてドリユの文学作品を問題としたのは当然の企図であった。

じっさい収録された論者はわれわれの期待を裏切らない。今までほとんどのばあい戦争体験の証言としてしか扱われることのなかった初期詩編から、萌芽状態にあるドリユ固有の思想を看取るマルク・アンレス。4冊の小説集に収録された短編小説を「虚構自伝 autofiction」と定義し、虚構と自伝のはざままでこそドリユは自由に創作できたとして諸短編への注意を喚起したジャック・ルカーム。ドリユの文芸批評を細部にいたるまで検討し、その先見と公正を認めるクリスチアーヌ・モアッティ。いずれもがこの作家の、けっして注目を集めてきたとはいえない分野の再検討を迫る優れた論文といえるだろう。とりわけ、ドリユにとって他者を論じることはとりもなおさず自分を論じることであり、その評価の基準は美的側面ではなく思想的側面にあったとするモアッティの指摘は、批評家ドリユの姿を的確にとらえて秀逸である。『日記』を対象とした論考としてはライマ・ドレル・レックのそれがある。レックは日記を3部——待機の時期、対独協力の時期、諦念の時期——に分け、そこにあらわれる情景描写の変貌に作家の美意識を探っている。さらに、『夢見るブルジョワジー』は単なる一家族の没落物語ではなく、破滅をもたらした〈夢〉への憎悪と愛着の混交する両義的な小説であるとするフランシーヌ・デュガ＝ポルトや、ドリユがジャック・ドリオ率いるフランス人民党に入党した理由を〈軽薄〉というキーワードで読み解こうとするリュック・ラッソンらの論考も示唆に富む。

だがおそらく本書のなかでもっとも刺激的な論文はジョン・E・フラワーによるものだろう。戦争小説「シャルルロワの喜劇」をこれまでの解釈のようにドリユの実体験に還元せず、あくまで主題論的に読み解こうとするフラワーは、作家の描く〈突撃→負傷〉というプロセスが、〈勃起→自慰による射精〉に対応していることを説得的に論証し、この小説が女性を排除した英雄的社会の建設を象徴的に描いたものであると結論する。ドリユの戦場体験が性的なものとして描かれることはしばしば指摘されるところではあるが、それを性行為ではなく自慰行為の表象として読んだのは、書評者の知るかぎりフラワーが初めてである。今後「シャルルロワの喜劇」を論じようとする者に大きな指針を

与える論文となりそうだ。

そして論集の掉尾を飾るのは、ドリユ研究をつねにリードしてきたジュリアン・エルヴィエの論考「小説家ドリユ・ラ・ロシェル」である。ドリユにとって小説を書くという行為は果たしていかなる意味をもったのか。ともすればそのアンガージュマンのみが注目され、自死の直前まで彼が小説家でありつづけたことが忘れられがちな状況であればこそその間である。エルヴィエによれば、ドリユにとって小説を書くことは世界と自己を認識し、それを変えていく作業であった。エクリチュールそのものが彼の〈行動〉だったのである。ドリユの小説観を的確に論証してゆくエルヴィエの発表は、彼の長年にわたる研究の厚みを感じさせ、本書を締めくくるにふさわしい内容である。

*

以上、収録論文を駆け足で紹介した。コロックに集まった人々の研究テーマもアプローチの方法もさまざまではあるが、しかしそこにはひとつの共通点が認められる。それはドリユにたいし虚心に向かいあい、資料を丁寧に読むことから新たな作家像を築きあげようとする姿勢である。もちろん虚心に向かいあうとは政治的判断を捨て去ることではありえない。ファシズムへのアンガージュマンをおこなった作家を研究するばあい、ひとは作家の〈罪〉にたいする共感なり反感なり、あるいは無関心なりを、なんらかのかたちで表明することを迫られる。だからこそダブルは、冒頭に学問の自由と中立性を掲げること、対独協力作家研究の正当性を主張しなければならなかった。畢竟ドリユを研究することは無垢ではありえないのである。ならば彼を読もうとする者はつねに作家の政治思想にたいする自己の判断を、たとえそれが無関心であっても明確にしつつ、しかしその判断を先入見とすることなく資料を読み解いていくことが求められるのだ。それはきわめて難しいことなのかもしれない。しかしコロックに参集した研究者たちはその困難を見事に克服しているのである。本書は、断罪でもなければ復権でもない、新たなドリユ研究の序章となるだろう。その意義にはじつに大きなものがある。

註

- 1) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Journal 1939-1945*. Édition établie, présentée et annotée par Julien HERVIER, Paris: Gallimard, coll. «Témoins», 1992.
- 2) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Textes retrouvés*, Monaco: Éd. du Rocher, 1992; Pierre HEBEY, «*La Nouvelle Revue Française*» des années sombres (juin 1940-juin 1941). *Des intellectuels à la dérive*, Paris: Gallimard, 1992; *La Nouvelle Revue Française*, n^{os} 322-328, revues reproduites par procédé photomécanique en un volume, Paris: Gallimard, 1992.
- 3) Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Correspondance avec André et Colette Jéramec*, présentée par Gil TCHERNIA et Julien HERVIER, Paris: Gallimard, 1993. この書簡集の詳細については、拙稿「あるファシストの青春——ドリュ・ラ・ロシュェルの書簡集刊行をめぐって——」、『流域』第38号、青山社、1995年2月、4-8頁を参照されたい。
- 4) もちろん今なお多くの基本資料が欠落していることは認めねばなるまい。何より『ファシスト社会主義』や『ドリオとともに』に代表される政治的エッセーが入手しにくいのが痛い。これらが再版されれば〈ファシスト作家〉ドリュについて、さらに理解が深まるはずである。
- 5) *Drieu la Rochelle. Écrivain et intellectuel*. Actes du colloque international organisé par le centre de recherche «Études sur Nimier» à la Sorbonne nouvelle des 9 et 10 décembre 1993. Textes réunis par Marc DAMBRE, Paris: Presses de la Sorbonne nouvelle, 1995.
- 6) Voir Solange LEBOVICI, *Le Sang et l'encre. Pierre Drieu la Rochelle. Une psychobiographie*, Amsterdam et Atlanta: Éd. Rodopi, coll. «Faux titre», 1994, p. 14.